

「茶屋場の辻」

(松原町・竹島町)

古代の府相は海水面が高く、JR東海道線より南側の低地は海中であったと思われます。

1181年、藤原俊成が竹谷・蒲形荘の開発成就を祈願して、琵琶湖の竹生島より弁財天を竹島へ勧請しました。当時の竹島は岩場が水中で今の半分程度の大きさ。ホテルの城山は海に突き出た半島でした。その後、海退現象により数百年かけて海中から現れたのが現在の府相です。中世、鶴殿氏が蒲郡を支配し、城山に出城を設けた時から府相に人が住み始めたと思われます。1869年(明治2年)の人口は778人(184戸)でした。

江戸時代、西郡藩主松平氏は竹島弁財天を八百富神社と改め氏神とし崇敬し、参勤交代の際には共揃いで参詣することを恒例としました。その折、この辻で殿様がお茶の休憩をしたことから「茶屋場」と呼ばれたと伝わっています。

明治の末、名古屋の財閥滝信四郎がこの地の風光に感動し、常磐館・蒲郡ホテルを建てました。また、竹島橋を架け蒲郡の名を全国に発信し、観光開発に多大な貢献をなしたため、昭和30年頃の夏休みには、列車が停まるたびに海水浴客が列をなして押し寄せ、この地に砂煙が立ったと言われています。

この絵は、辻の雰囲気を出すため少し退いて描きました。複雑な六差路で見えないが、中央の小型トラックの左に西方の犬飼港への浜道があり、右手前の道につながる古道です。さらに右建物の裏に永向寺への古道が隠れています。



現在の景色

目次 Contents

中央子育て支援センターがオープンします	3
「ほほえみプラン21」を進めています!	4-5
「暴力のない社会」を目指して	6
市民相談	7
MYスクール・図書館だより	8
まちの達人・読む水族館	9
遊びにおいでよ児童館へ	10
健康カレンダー	11
お知らせ	12-24
クイズまちがいさがし	25
8・29-30ゲリラ豪雨のつめ跡	26
ふれあい宅配便	27
ポーランドデー映画会	28
こどもミュージアム	28



樹木医・技術士(建設部門・環境部門) 原野幹義

「葉見ず花見ず曼珠沙華・ヒガンバナ」

秋の彼岸のころに、土手や道ばた、墓地などに群れて咲くヒガンバナは、日本の里の秋の風物詩となっています。ヒガンバナは、葉に先立ち1本の茎がすくと伸びて、先端に数個のまっ赤な花を輪状に付けます。花びらは6片で細長く外側に反り、へりはひどくちぢれています。また、6本の雄しべと雌しべが長く出ている花姿は独特な美しさです。花は1週間ほどで見頃を終え枯れてしまい、3倍体のため実には付きません。そして、その後ゆっくり葉が出てきて、春の終わりころには枯れ、冬眠ならぬ夏眠に入ります。葉と花の時期が重ならないため、ヤブランのようなその葉姿を知らない人も多いようです。地下にはラッキョウ形の球根(鱗茎)があり、有毒ですが、飢きんの際には晒して食べられていました。

鮮血のような赤色とお墓に多く見られることから、忌み嫌われる事が多かったヒガンバナですが、最近では「ごんぎつね」の半田市、新美南吉記念館近くの矢勝川の百万本計画や、お隣静岡、掛川城下の逆川には、将門の乱で有名な平将門とその家臣の首実検を行った「十九首塚」があり、その歴史をふまえたヒガンバナの名所作りが進められています。

阿木耀子作詞「曼珠沙華」では、山口百恵が「マンジュウシャカ」と熱唱していて不思議な気がしていましたが、案外「先ず咲(く)花」で正解だったのかも知れません。

